

Interview

中世鎌倉の景観を語る 私の発掘覚書

Medieval Landscape of Kamakura

河野 眞知郎 (鶴見大学文学部 教授 / 共同研究員) KAWANO Shinjiro

今年度、作業班「環境認識とその変遷の研究」に加わっていただいた河野眞知郎先生に、鎌倉についての想いをお聞きしました。

まず中世の考古学というジャンルにどういういきさつを経てたどりつかれたのかをお伺いしたいのですが。

河野 個人的なことでは、学部生時代は弥生時代や古墳時代の集落を扱っておりました。その頃、大学の考古学関係の講座で、中世を対象としていた所は、まずなかったと思います。ところが、大学の先輩が鎌倉市に勤めていたので、鎌倉の発掘に引っ張り出されたのです。鎌倉でも都市再開発の折に、ビル工事などに伴う埋蔵文化財の発掘調査が必要になってくる頃でした。1970年代の中頃だったのでしょうか。私は考古学の遺跡発掘の経験が多かったので、「おまえしばらくやっつけいけ」ということで鎌倉を掘るようになりました。その頃は、考古学というと縄文や弥生という古い時代ばかりしか習っていませんでした。ですから、出土するものが、「これはなんだ、これはなんだ」ということの連続だったわけです。青磁だ白磁だ、瀬戸だ常滑だと、種類を見分けるのにずいぶん苦労しました。

それともうひとつ、鎌倉の地層が非常に難しかったです。関東地方の普通のところだと、弥生時代とか縄文時代の遺跡ならば、どう掘り間違っても関東ローム層に突き当たれば、そこでおしまいとなります。逆に関東ローム層に掘り込みがあれば、それを調べればよろしいという感じだったのですが、鎌倉の場合、遺跡の生活面は次々に盛り土でかさ上げされているので、層位が複雑なのです。黒土の中にある、黒土で埋まった穴の跡を見つけるのは、慣れないうちは苦労しました。でも、いっ

たん盛り土層を見分けられるようになると、層の上下関係で時期の新旧がつかめて、面白くなってきましたね。

では、発掘としてはもう応用問題なんですね。中世という時代を研究される場合、文書を通しての研究のほかに、一方で金石文というジャンルがありますね。板碑であるとか、宝篋印塔であるとか、この分野も、いわば「信仰の造形」といいますか、モノを扱うわけですが…。

河野 鎌倉には石造物自体は多いのですが、金石文が豊富にあるというほどでもないわけですね。それと、板碑や石塔類に金石文をのこした階層と、歴史学の語る源氏三代、あるいは北条氏などとは直接リンクしないわけですね。それは階層の差だけでなく、時代的に見ても、考古学資料がのこるのは、鎌倉時代でもあとの方が多いです。ですから考古学は考古資料だけ、それから文献史学は史料だけと、わりと離れてやってきたところがありました。土層の積み重なりから、時代順を追っかけていけば、あとは文献史学の成果と、どこかでつながるところが見つかるだろうと、かなり甘い見通しを持っていたような気がします。それは甘い考えに過ぎなかったのですが…。

そうすると、地層の積み重なりかたで、相対的な新旧とか構造とかいうのは出てくるんでしょうけれども、絶対的な年代というのは…。

河野 放射性炭素の年代測定ですと、ちょうど一番年代が出にくい時代に当たりますね。ですから、金石文でも何でも良いのですが、紀年名資料がでてくるのをとにかく



期待するというのが本音です。それと、もうひとつ、状況証拠も期待しています。例えば、元弘3年(1333)に鎌倉が攻められて焼け落ちたということがあれば、その焼けた層を探すというのも一つの手です。火災に関する記事はわりと役立つだろうと思っています。でも現実には、なかなか定点として掴まえるのは難しいですね。

鎌倉の場合は「吾妻鏡」という一級史料がある。逆にそこに縛られてイメージを固定してしまっている一面と、それだから発展した部分と、両方あるということを前に話されていました。

河野「吾妻鏡」というのはどうしても「將軍記」という性格で、將軍に関する編年体のものですから、語られるところは、社会の上部構造であって、下の方の「凡下」などという下々の人たちに関しては記述が少ないのですね。ところが遺跡の発掘では、実際にその土地に住んだ様々な人々の痕跡が出てくるわけです。遺跡には誰そのの屋敷の跡です、と書いたものはのこっていませんし、時期によって居住者の交代もありえます。すると、「吾妻鏡」が述べている鎌倉と、実際に掘り出される鎌倉というのは、必ずしもぴったりと一致したりしないのです。これは当然しかるべきことでしょうけども、そのずれを何とか歴史の流れとすり合わせていきたいと、そんな努力をしています。でも、考古学資料というのは、日常生活の廃棄物、つまりゴミが主なものなので、人々の生活実態は想像できても、歴史の流れや歴史学の理論と合わせるのは、なかなかうまく行きませぬ。

中世の日常生活がある程度イメージできるような資料の発掘が体系的に行われているということになると、これは全国の中でも限られたケースになりますね。

河野 確かにそうです。草戸千軒町遺跡(広島県)や、一乗谷朝倉氏遺跡(福井県)の例が中世考古学では早くから成果をあげています。草戸千軒はかなり鎌倉と似た状況なのです。市中の人々の暮らしの跡なわけですから。一乗谷の場合には、やはり戦国時代の城下町ということで、あちこちにある城下町と較べながら、見ていけるわけですね。鎌倉の場合には中世前期の都市ですが、古代の律令都市でもなく、近世城下町でもなく、都市論的に

もなかなか一筋縄ではいかないところがあります。ただし、鎌倉の町は狭い谷にどさっと資料が埋まっています、しかもそれが何層にも重なっていますから、これは、着実に丹念にやっていけば、相当なことが分かるはずだという見通しは最初からありましたね。

それは全国基準に持っていける性格のもの、鎌倉ゆえの地域性・社会性が反映している面と、その両方が分かれてあらわれてくるのでしょうか。

河野 そうです。鎌倉を掘りはじめた頃には、草戸千軒と比べれば、すぐになにか明らかになってくるだろうと思っていたんです。ところが、やっぱり鎌倉は鎌倉なんです、他の所と比較すると、違いは大きなものがありますね。例えば、鎌倉時代の後半になると、浜辺のほうに非常に大きな地下式の倉が見られるようになるということがあります。このような倉は、全国的に見て同じ構造の例がないんです。鎌倉のものは地中に太い角材で地下室をつくり、ときには板石で床や壁をつくっています。これは鎌倉独自のものじゃないかなと思われるんです。鎌倉の主要な居住者である武士たちは、自分のところの本貫地がありますから、当然その領地からの年貢を入れた倉とも考えられますが、中国との貿易品を納めた倉とも考えられるわけです。各地の荘園であるとか、村落遺跡と比較すると、違いは際立ったものがあります。寺跡、城跡や住居や耕地跡があって、人々の使ったものが見つかるというのとはちがっています。ですから各地の研究会で、鎌倉の事例を発表すると、それはまあ鎌倉だけの問題じゃないのということで、拒絶反応みたいなものがあつたんですが。

私は、鎌倉をやり始めてから、石井進先生・網野善彦先生といったような方々とお付き合いできまして、そのなかで特に網野先生の見方から非常に影響を与えられました。諸国を放浪する人間の存在ですとか、そういうことを考えると、はじめて鎌倉は鎌倉だけじゃなくて、各地とリンクしているのだらうと。各地との商品流通の問題は、出土品の産地同定で見えやすい一例です。鎌倉と各地との繋がりが、モノを媒介として見えるというようになりました。生産者と消費者だけでなく、流通に携わる者にも眼を向けるようになりました。



それからもうひとつ、やっぱり文献史学と歴史地理学の方法ですね。これが各地の荘園遺構を「景観」として捉えるということをよくやってきていますね。例えば地頭館の伝承地と、それからその菩提寺と、村社みたいなもの、さらに農耕地及びその周囲の百姓屋敷といったものを、一つの地域のセットとして見るようなアプローチです。これに加えて、考古学的な発掘がそういった実際の遺構で明らかにできる所も増えています。ある地域の中世の景観というものが、ある程度描き出せるようになってきている。

それでは鎌倉の場合には、どういった景観を描き出せるのだろうか。在地の者と都市に生きた者の差は何なのか。彼ら領主は武士ですから、鎌倉にお勤めにやってくる。すると、そのときに鎌倉に在地のものを持ち込むじゃないか。また、鎌倉の中で得たものを、各地に持ち帰らないだろうかとも。こういうことで、はじめてその各地のあり方と鎌倉のあり方というのが、やっと具体的に語られるようになるんじゃないかと思います。

鎌倉を研究されてこられて、考古学からの視点と、歴史学、文献史学からの視点と、その本質的な違いとといいますと、河野 これは、時間幅ですね。歴史学者の場合には、ピンポイントで何年何月何日に何があったか、いつまでにどう動いたかというプロセスが問題になるわけです。ところが考古学の場合には、定点資料といいますか、その何月何日まで絶対にわかるわけではないんです。ここからここまでの大まかな時間幅の間になにか変わったのかなあという、物質面での変化が見られるだけなんです。その背景を考えようとする姿勢は欠かせないと思うのですが、私自身の個人的な見方かもしれないですが、考古学をやっている人の中には、その時代にどんな物があったかを、ある程度説明すればことたれりとするような姿勢になっているような気がします。とくに、発掘アルバイトに来る学生の場合には、いわゆる『発掘調査報告書』という、事実関係と出土品のリストアップさえ済めば、後の解釈は歴史学者なり、どこかのえらい先生なりがやってくれるんじゃないかと…。

資料提供みたいな形になりますか？でも、考古学の視点

からゆえの洞察力とか、生活認識というのは当然そこに出てきて…。

河野 そうならなきやいけないんですけどね。これは、私の教育が悪いのかもしれないんですが。私が最初鎌倉を掘り始めたときには、なんでこれがここに落っこって、土に埋まってるんだというところから考えはじめました。例えば家の前から何かが出てくると、どういう家の前なんだということを気にしてくわけです。次に頼るのは文献史料ですが、おそらく凡下の生活については文献史学はあまり語ってくれませんから、それでは民俗学のほうで何か似たような事例がないだろうかと考えていくわけです。町という生活空間の中で、どこでどういう暮らしが行われたかを考える際に、民俗学的な見方は欠かせないと思います。時代の流れについては歴史学と協力する。すると考古学独自の見方というのは、生活感覚からくる想像にすぎなくなってしまう恐れもあります。

人文系の学問は、基本的にはその「想像」はひとつの軸として考えられていいと思うんですけども、でもおっしゃられるような作業において民俗学というのはそれほど頼りにならないような一面も持っているような気がします。たとえば古いと言われてるものが意外と古くなかったり。そのところは単に伝承されているということだけで記録をしますから。



鶴岡八幡宮の上空から

おなりやま
通称御成山

C
東麓は奈良・平安時代に山裾を切り下げている。

いりや
窟堂跡

かつて岩窟あり（現在、崩落で喪失）頼朝入府以前より所在か？

低湿地

D
土盛して、13世紀中には宅地化。

滑川

E
川底には岩盤露出。



無量寺（無量寿院か？）

谷奥は岩盤を削り出した庭園、苑池あり（13世紀半ば頃開創か？）

寿福寺

以前はかなり広い境内地をもつ。中央谷の奥は二段の平場で、奥の崖に多数のやぐらあり（13世紀初めの開創）



~ : 寺院造営に伴う地形改変跡
 ㄨ : 開削した跡が認められるところ
 A~E : 交通路、流路 他
 (イ)~(ハ) : 鎌倉時代の公的機関所在地

宇津宮辻子幕府跡

微高地南端部に広地。四方は溝（堀）で囲まれる。1225~1234年に所在。

浄光明寺

山裾をかなり削って平地を造り出す(13世紀中葉開創)

多宝寺跡

山裾を削って三段の平地を造成(13世紀中葉開創)

亀ヶ谷坂

切通し、13世紀中には存在。

A
A

建長寺

山裾、岩盤を削った造成地(13世紀中葉に開創)

B

巨福呂坂(小袋坂)

切通し。13世紀中葉に整備。

八幡宮供僧坊跡

山裾を削り、平地には厚い盛土がくり返される(12世紀末に造成開始)

八幡宮上宮

山の中腹を大きく掘削して平坦地を造り出す(1191年造営)



(口)

(八)

(口)

(八)

若宮大路幕府跡・北条氏小町邸跡

微高地の中央に広地。四方は堀で囲まれる。1234~1333年に所在。

政所跡

微高地の左側に立地。周囲に堀、土壁を築く。盛土造成もあり。12世紀末~1333年に所在。

八幡宮三方堀

それ以前の地形を無視し、幅3m以上の堀をつくり、およびその内側に土塁を築く(13世紀初頭成立)。

データ作成 河野真知郎
撮影 香月洋一郎

河野 確かに、民俗学で近世を突破して中世まで遡れるものは、かなり限られるんじゃないか。鎌倉の遺跡でも、井戸埋めに節抜き竹を入れる事例とか、胎胞埋納とか、民俗事例とかさなるものは少数みつかるにすぎません。新潟県の奥山の荘や荒川の保の場合、歴史地理学で導きだしたものが、後に発掘によって、どうにか合致しそうなところが少しずつ見えてきてますが、逆に近世の民俗誌とは合致しませんね。まあ、考古学のほうで出してくる資料というのは、現在の地表にまで伝承されたり、あるいは文献に語られたりするものと合致しない。かといって、民俗学や文献史学とすり合わせを試みない限り、資料からの想像だけでは、必ずしも説明しきれないわけじゃないですね。

説明しきれないという次元になると、おそらく諸分野の資料をあわせても、中世の場合にはなかなかむずかしいのかもしれませんが、ただ、たとえば2つのA、Bの資料があって、これを前提としてこう考えるのが一番自然だというある洞察の方法を出していく。で、新たにCという資料が見つかった場合に、ひとつ資料が増えて洞察の方向がちがったとする。そんな時、AとB2つの資料しかなかったときの洞察力や方向性が、それでまったく無意味にはならないような気がするんですが。データ2種類の時はこんな風に類推できる。でも資料が3つ4つと新たに出てきたら、こういうふうに類推できるという洞察力の方向性自体は、新しい資料が発掘されて結果が変わっていても、それはそれでひとつの凡例的な叩き台として力を持つような気はするんですけども。

河野 考古学で「成果」を求められると、当りを求めすぎちゃって、例えばAかBかどちらかに決めつけるような結論を急ぐところがある。そこにCというものが出てきた時に、これはAとうまく当るか、あるいはBとうまく当るか、さらにAとBのどちらも正しくないのか、というように落ち着き先を求めすぎちゃうようです。AでもなくBでもなく、あらたにCを加味して考えるという方向に行けなくて、その当り外れにこだわってるところがあるんじゃないかと思うんですね。

そうすると例えば、新たに資料Cがでたということで、それを含めてひとつの体系をだして、それ以外の体系とすり合わせて、方法として戦わせるんじゃないかと、合致点といいますか、そこがすごく関心事になるという？

河野 そうです、そこが気になる。例えば、霜月騒動で殺された安達泰盛の屋敷跡の比定地を、今日の甘縄神明社のそばに求めるのか、無量寺ヶ谷の方に求めるかというとき、今小路西遺跡（御成小学校内）の位置づけは、当り外れの方に話が行ってしまう。当りを探し続けすぎて、それがためにCという資料を解き明かすためのパラダイムみたいなものが作れなくなる。そうするとAとBの枷からも離れられない。そのへんが今、考古学が陥っているところじゃないかと思うんです。

鎌倉の場合は特にそのプレッシャーは強いんでしょうね。河野 例えば大倉幕府、若宮大路幕府というのは、ここでなくては行けないという思い込みが強いわけですから、そこを掘って、ちょっと違うようだなと思っても、疑問を解き明かすより、当りか外れかに行ってしまう。もうどっちにも行けなくなっちゃうんですね。

では検討、模索を前提とする積極的な意味でのペンディングというのは嫌われるようになった…。

河野 成果が求められるから、発掘している人たちも何かに結び付けたくなるんでしょう。となると、ある程度広がりのある街中で、何層も積み重なっている遺構面を着実に解きほぐしていくという作業に、じっくり取り組んでいられないんですね。悪く言えば、功名争いみたいなことになってしまいます。

鎌倉の場合は鶴岡八幡宮があってその前に海の方へ向かう大路が通ってる、それ自体は基本的には変わっていない…。河野 基本は変わってないと言えるんですが、大路の段葛の玉石積みなど、近世・近代以降加わったものを除いていくという手法で、確かめていけると思います。

地層が重なっているというのは、これは人工的な作用が多いんですか？

河野 ええ、それはかなり人工的なもので、今年度のCOE年報に書いたもの（「中世都市鎌倉の環境 地形改変と都市化を考える」）が、いわゆる都市化にともなう地形改変の問題です。山を切り崩し、谷を埋め立て、それで新たな環境を創出しているんです。それを実地に即して解き明かしてみたいということで、さまざまな手法から見えてくるところをとりまとめたんです。

ただ、やはり文献史学なり歴史学なりが言っているよ



地形改変の痕跡 (撮影 星野玲子)

写真1：寺院創建期に開削されたであろう崖（浄光明寺境内）
手前の池は最近の構築だが、崖下にはやぐらが掘り込まれている。

写真2：報国寺奥のやぐら群
山腹の崖に掘り込まれた岩窟形態が特徴。

写真3：建長寺奥の尾根線にある石切跡（十王岩近く）
時期不詳であるが、近世のものらしい。



うに、鎌倉は政権のあるあるいは軍事的な都市であるという枠がありますから、誰が主体となってそのようなその新たな環境、ないし生活領域を確定していったかということは考えなくてはならないわけです。環境変化という自然史的な捉え方だけではできないはずです。そこをうまく埋めていくのは、なかなかむずかしいものだと実感しました。

鎌倉幕府が滅んだ後、あの谷は鶴岡八幡宮の門前町としての生命力がそののちもずっと続いてきたということになるんですか？

河野 その時々々の生命力の強弱はありまじょうが、続いてはいますね。南北朝期における足利氏の鎌倉御所や、足利氏に安堵された寺であるとか。むしろ寺町として残っていった側面が強い。八幡宮もその後、小田原北条氏などの庇護を受けてかなり造作をやっております。中世の間の動きと、その後の近世以降の動きというのは、考古学的な資料としてとらえることができます。それらの時代を確定しながら、「その後」に加わったものを剥いでいくことによって、鎌倉時代ないしは中世前期というもの、より浮き彫りにできればと思ったんですが。

前にお話を伺ったときに、近世以降の鎌倉というのは、あまり研究者がいないと…。

河野 文献史学はともかく、考古学では、南北朝以降もそんなにいないですね。鎌倉というからには鎌倉時代が中心課題で、それ以降の時代は研究してもうま味がないようで…。

ですから今回の年報の原稿でふれたかったのですが、結局力及ばなかったのは、近世、ないし中世後期の紀行文などから、もう少し景観的に読み解いていくことでした。あるいは近世に、鎌倉観光のための絵図が随分出版されていますが、その読み解きとか、それから地境などのわかる村絵図、こういったものを読み解きながら、それをも鎌倉の土地に刻まれた様々な痕跡と見て、中世前期まで遡る少しまわり道的なやり方もあるんじゃないかと思ったんです。

土地に刻まれたということで、実際に鎌倉時代に限定できるような加工の痕跡を絞り込むことも考えました。例えば寺の場合でしたら、創建時に相当の工事をしますから、寺絵図、現地に残っている様々な構築物、あるいは金石文などから、ある程度年代を絞り込んで、中世のものを洗い出していったわけです。その結果、寺とか墓



を作るために山が切り崩された土砂が谷を埋めるのに使われて、そこに人工的な環境ができてくる、それが都市化、都市の拡張の結果だと、今回年報に書いたわけなんです。

そうすると、確かに鎌倉時代になされた工事跡ばかりでなく、近世・近代に加えられた痕跡もかなりあって、それが区別されずに、「三方を山に囲まれた、防禦に適した鎌倉の地」という、昨今の人々の認識を形作っているような気がするわけです。

一方、鎌倉時代の都市開発による生活圏の広がり、都市内の土地利用、その実行者を明らかにすることも、逆照射されるだろうと思ったんです。

そんなふうにならば、そして近世の衣をずっと剥いでいくという発想、身近な時代から一枚一枚剥いでいって、発掘される中世にどんな意味があるかというのは、これはある意味では通時代的な発想…。

河野 発想というより、枠組みの解釈の仕方もかもしれません。都市史という面では、どうしても鎌倉は、それまでの律令体制とはちがう武家政権の都です。するとそこにかかわった人たちの考え方というのは、必ずしも奈良、京都を下敷きにしない発想だったろうと思うんですね。各地の荘園の篡奪者にして在地領主である武士たちが集まってきて作った都市なんで、そこにある発想というのは、各地との比較対象になるものは少なくないんじゃないかと思います。しかし、実際につくりあげられたものは、各地の寄せ集めではなかったわけです。どう動いて何をしたら鎌倉という都市は成立したのか、解き明かしたいですね。

ひとつは新しいものを取り去ることもやったんですが、もうひとつは過去からの、例えば古墳をつぶして平地が広げられてるとか、律令の郡衛跡が宅地化されるなど、平安以前からの変化も考えてみました。これは考古学のほうの得意技なんです。両者をあわせても、やはり鎌倉時代に一番多く手が加わっているのがある程度はわかってきました。

今回は環境の変化ということに重点を置いたので、いわゆる流通とか、各地との交流ということに関しては、あまりふれていません。考古学のほうのモノは、中世では非常に広く動くんです。例えば焼き物ひとつとりましても、もう広域に流通する商品生産をやっているのです。かつて、民俗学で常民という考え方が設定されたとき、

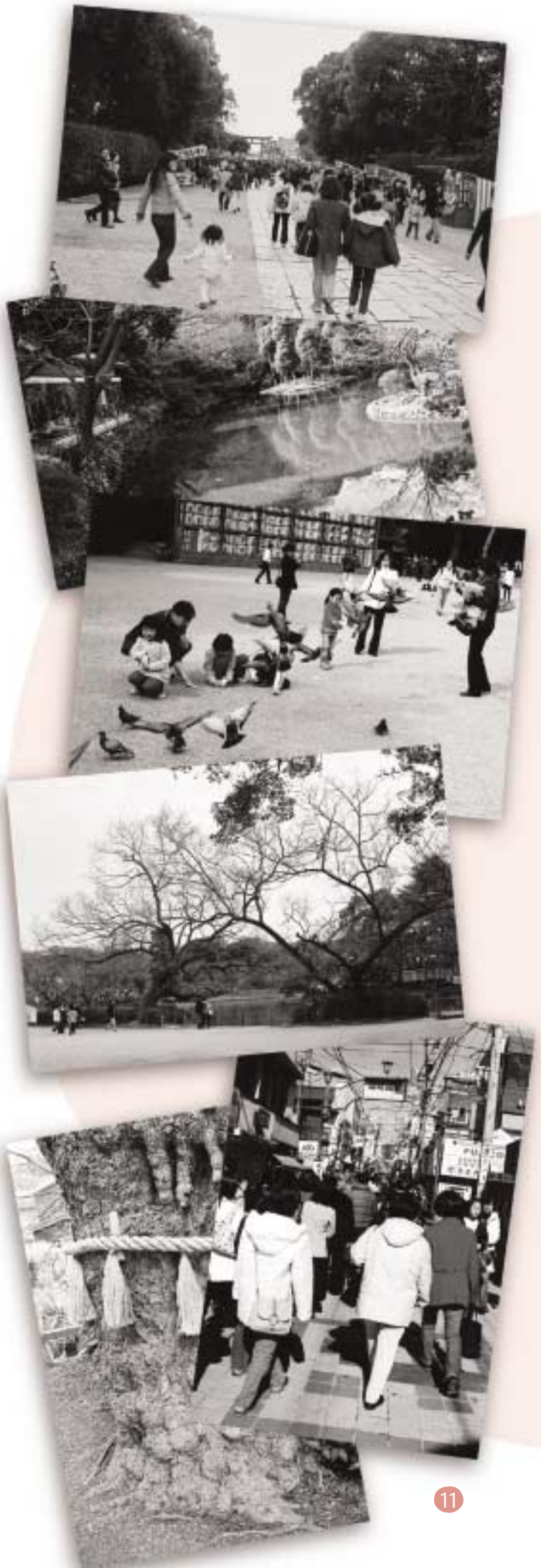
定着して自給自足的な経済が、かなりイメージされていたはずですが、現実はまだ中世の段階で、都市でなくてもかなりモノは動いて、しかもお金でモノを買っているのです。網野先生がよく言われていたように、「百姓」は農民とイコールじゃないんだということ。山野河海における活動や様々な職能民の存在とその移動といったこと。すると鎌倉は生活物資さえもほとんどは、周辺地域をこえた外から搬入されてくる、ないしは買ってくる。列島規模に立脚した消費都市に成長してしまうわけです。

ですから環境問題ということ考えた場合でも、例えば鎌倉で食べ物の滓がでできますが、この食べ物のルートは、決してその鎌倉の周辺からとは限らないと、私は常々主張してきました。ところが、鎌倉の町が衰退する15世紀のものなのですが、永福寺奥の谷で、武家屋敷らしき跡が見つかり、その井戸からは鹿の骨がいっぱい出ました。それと一緒に弓の折れたものが出ました。狩猟の結果としての鹿の骨があったと理解できるわけです。ところが、この鹿の骨を動物学者に分類してもらったところ、雌や子供の鹿だとかが入っていて、個体として狩猟対象にする立派な雄鹿ではなかったのです。となるとこれは、食害問題、つまり農作物を食べに来る害獣としての鹿を、排除する狩猟であったと、指摘できるんですね。

都市というのは消費的な場であり、それを支えるためにはヒンターランドというような周辺領域だけでなく、遠隔地から物資を供給しなきゃいけない、そのための流通経路も考慮すると、歴史学にしる考古学にしるイメージとして持っているんですが、微視的には建前どおり行かないこともありそうです。

地域の周辺環境から少しは取り入れたものとして、「鎌倉石」の問題もあります。お寺のお堂を建てるための土台石は安山岩で、かなり遠くから運んでくるんです。それから太い材木などもかなり遠くから運んでくるわけです。しかし、近隣でとれる山の石材、あるいはその崖を切り崩したときの土砂も土木建築の重要な資材になっています。近世には鎌倉石と呼ばれる凝灰岩は、地元で手に入るものです。これを土台石や石垣や溝の縁石などに多く活用しています。

それから、食物の滓としての貝殻も出土しますが、これも各地から商品として運ばれてきた粒の揃ったものと、その辺の海で採ってきたような小さなものがあります。やはり近辺の環境から少しは得ているものもあるのです。その辺は今回の原稿では、こまかなモノのほうま



(イ)

(イ)

佐助(佐介)ヶ谷

A

13世紀には寺・宅地できる。

松ヶ谷

B

13世紀に寺院・宅地に。

佐々目(笹目)ヶ谷

C

13世紀に宅地に。

大仏殿背後の山(崖)

大仏坂切通し

13世紀には所在。



The excavations in Kamakura have given us various kinds of products and goods that were in this town in the middle ages.

Many samurais who lived there produced nothing, but they bought and owned much. So, it is natural for various goods to have been bought to the city.

We think Kamakura was not the only place to have had such a characteristic. There must have been other towns and cities where goods were collected and distributed.

They were, in a sense, "small Kamakuras".

The moving of products and goods made various-sized distribution centers around the country.



(口)~(ホ)

人骨集中地点

13世紀から14世紀にかけての遺体遺棄、集積ないし墓地。

砂丘地帯の高まり

古代：東海道走るか？
中世：13世紀後半から14世紀にかけて地下倉が数多く造られる。

崖を切り、裾に「やぐら」

茶毘跡あり。盛土の平地には町屋らしきものができる。

大仏様の上空から

データ作成 河野真知郎
撮影 香月洋一郎

大仏(大仏殿)
13世紀中頃に開創。

大仏殿参道(推定)

Interview

で立ちいらなかったのですが。鎌倉の流通を問題にするときには、日本全国にわたるマクロな面と、もう少しミクロな実態がありそうですね。量的にはマクロなものが圧倒的ですが…。

それだけモノが流通してたというのは、鎌倉ゆえの磁場がすごく強いのか、それともおそらくそういう性格の土地自体があつた段階で全国いろんなところにあつて、それゆえに鎌倉も同性格であるが大きな存在としてあつた、そう考えたほうが自然なのか、どちらでしょうか。

河野 それについては、やはり鎌倉幕府と在地の武士との関係から考えなければならぬでしょう。幕府の下に均質な御家人が集結していたというのではなく、鎌倉後期になると、北条得宗が各地に勢力を伸ばします。その中で北条氏の祈願寺を作っていくのです。するとその祈願寺になったところには、どういうわけか鎌倉と同じような奢侈的な出土品が見られる。これは考古学的にモノがでるといふことにすぎないのかもしれないけれど、鎌倉と地方のストレートなつながりが意外にあつたんじゃないかと思えます。

私は10年ぐらい前までは、「鎌倉ブラックホール論」というのを言っていて、鎌倉というのは何でも各地からのものをのみ込んでしまうだけで、地方にちっとも出さないじゃないかという話なのです。だから鎌倉と地方は比較しづらいんだよと言っていたんです。ところが最近、各地に「小鎌倉」と言つて良いような、鎌倉と直接人の行き来なんかがあるところが見つかつて、そこへは純粋鎌倉的なものがポンと入っていくようなんですね。そうすると、中世に商業流通が盛んになると言つても、それはベター面という形ではなくて、やはりその時の人々の関係のなかで特徴的に形作られるんじゃないかという気がしています。

でも、その「小鎌倉」的なものの土地の性格や痕跡というものは、時代が変われば流されていく性格のものもある…。

河野 その土地の支配者が変わって、鎌倉との関係の薄い誰かにとられてしまうと、鎌倉的でなくなる可能性はありますね。

鎌倉にとって各地域の生産者、ないしは生産の統括者である武士、つまり地方領主は、鎌倉に来るのはお勤め人としてなんです。であれば鎌倉というのは、基本的に消費生活のみで成り立つ都市と考えてもいいんじゃないかと思えますね。ただし、消費のための原材料を運んできて加工したりする職能民の存在がなければ、消費都市は成り立ちません。地方の武士たちが、自分の本貫地から鎌倉へ、食料からなにから必需品を全部運んできてたというふうにも思えないんです。そういう経済的な問題をやろうとすると、まさに文献のピンポイントでいけるような良好な史料はそうそうないでしょう。また、民俗学で「鎌倉街道」伝承が残っているところも、どれだけ古く行けるかわかりません。現状は、ものの組み合わせから想像しているわけです。

ただ、それ以外に考えられないとか、こう考えるのが一番妥当だという叩き台としての方向性は、資料とのつきあいの中でなにか出てくるのが自然だと思うんですが。河野 ええ。そうなるべきですね。私自身は想像を何種類かの仮説として立て、資料を細かくあらうなかで、一番妥当じゃないかなという落ち着き先を見つけようとしています。

鎌倉付近の民俗報告書を読みましても、中世に栄えた鎌倉だからこの民俗があるというような性格は、どうも見えにくいような気がします。基本的にもう神奈川県あの地域の、ひとつの民俗伝承地という面しかできにくい。だから逆にそれを「鎌倉」ということに結びつけるとすごく不自然な感じもするんですね。でも鶴岡というお宮があつて、あそこここの大路があつたというのはおそらく中世から何百年と続いてきているわけで。そうするとどうしてもあるバイアスをかけて民俗資料を読んでもみたくなる部分も出てくるんですけれども。

Kamakura is located in a complex valley.

There is a big main valley in the center that faces the sea and around the main valley, there are many smaller ones.

In the center of the main valley is Tsurugaoka Shrine, which is the main landmark in Kamakura.

In almost all the small valleys around the main valley, shrines or temples have been built.

河野 鎌倉の民俗で残っているかなと思われるのが、祇園社にあたるかという八雲神社の祭礼の行列が、かつて足利公方のいた浄明寺のあたりまで行ったんだという伝承です。それでもこれは、中世後期に関するもので、さらに近世の祭礼の中に投影しているようなものでしょうね。このへんのことは、藤木久志さんが戦国史の見方でやっているなかで、「どっこい鎌倉は生きている」と言われるけれども、それら伝承が鎌倉時代まで遡れるかとなると、まあそう確実ではないですね。また鎌倉内の土地の小字名や、あるいは土地の言い伝えというのも、近世の名所の説明みたいな感じですね。鎌倉の考古学的成果と確実に結びつく、そういう言い伝えというのはちょっとないですね。

鎌倉をテーマとして研究なされて、これから枝を伸ばすとすれば、ある程度関東、そしてその外縁の地域をヒンターランドというふうにして、そうした地方にアプローチするほうが魅力があるのか、それとも全然違う西日本の鎌倉的なものに関心が向くのか…。

河野 これが難しいのは、鎌倉にいた武士が、新補地頭をはじめとして各地に散っていくんですね。特に西遷御家人もいっぱいいます。この連中は結構一族の間でネットワークを作りながら各地に行ってるみたいなんです。これは五味文彦さんが指摘しています。また、後世の武士たちは、「鎌倉以来」ということが彼らの誇りになっているみたいですね。そうすると、関東を鎌倉のヒンターランドとみるよりは、人とモノのネットワークを非常に広く、日本列島全体に広げて見る必要があると思います。

鎌倉的なものとは何か、というテーマになるんですね。

河野 ええ、国立歴史民俗博物館の小野正敏さんが言うのですが、焼き物のうちに「威信財」というのがあるんだと。武士の威信を表す特別な品々なんです。床の間飾りに青磁の花瓶がなきゃいけないとかですね。戦国時代には中国から染付が輸入されているけれども、ずっと昔の高級品がステータスになっているんです。それから茶道具もそうですね。

ところが、北日本のほうへ、特に東北北部から北海道へ行くと、中世後期にはお茶であるとか、庭園であるとか、あるいは連歌などをやる空間とかですね、そういう

ものがあんまりちゃんとしていないそうです。で、なぜかという、領主の周りにいる住人たちがそういったものに価値を認めないからじゃないかと。

旅行の宣伝で各地に「小京都」と言われるところがありますね。西のほうでは、大内氏の山口であるとか、大友氏の大分ですとかね。小京都といわれるように京都の文化を持ってきて、まわりの連中のなかでお屋形様とまではやされたらいい。北のほうはそういう装置がなくてもいいんだというのです。

鎌倉的な威信財を持って行って、それが通用するところと通用しないところがある。西のほうは全部通用しているんじゃないですか。でも西のほうは王朝の文化の強みもあって、鎌倉の威力はそう大きくないかもしれません。それから、武士の文化という、酒盛りのうつわとして「かわらけ」を使うのですが、東北のほうではかわらけを持たない地域もありますね。

では、鎌倉というものをひとつのメルクマールにする、東北というのは少し違ってきますか。

河野 実際には東北は、北条氏が相当力を入れていますが、恐らく北海道南部も視野に入れていたと思うんです。でも鎌倉時代には点と線のつながりで、むしろ南北朝の争乱の頃、後の東北文化をになう人々が広まっていったようです。津軽の十三湊の発掘を見ますと、ああこれは海の民と言うべきものなんだと思います。地域史という限定ではなく、人とモノのネットワークで広くとらえるといいんじゃないでしょうか。

かつて鎌倉で経験を積んだ武士の末裔が各地に散ったわけですから、鎌倉を明らかにするのが、武士のルーツを明らかにすると、言ってもいいかと思います。

はじめは武士が集まって鎌倉という都市を作り上げたはずなのに、じゃあ鎌倉のなかでできたのは何なのかと、問わなければならないでしょうね。各地に散っていく武士たちがひきずっていた鎌倉らしさとは何なのかと。これは考古学だけでは結論は出せないと思います。いろんな分野の人が集って、議論百出して良い問題です。「鎌倉学」というようなものがあってもいいんじゃないでしょうか。